

『青年ミヘルス研究』(1)

氏 家 伸 一

は じ め に

近年イタリアにおいてミヘルス研究が盛んになっている。⁽¹⁾その意味でも象徴的なのは、ミヘルス没後50周年を記念して1986年5月30日、北イタリアのトレント大学で催された「ロベルト・ミヘルス学界」であろう。イタリアとドイツ両国から参加した研究者の議論は『社会学年報』第1巻 (*Annali di Sociologia/Soziologisches Jahrbuch*. 2, 1986-1) にイタリア語・ドイツ語の双方で編まれた。序文でP. スフェーラはこう語っている。

「現代の社会学的思想の構築に貢献した人々の中で、数年前から本誌の貴重な創刊に取り組んできた（フランコ・デマルキに率いられた）社会学者グループが一連の〈祝賀式〉を開会するために選ぶに値する創始者がいるとしたら、それはロベルト・ミヘルスであった。

〈言及されるわりには知られていない〉とデマルキ本人が本書の巻頭論文で特徴づけている。しかし、それでも不十分である。ミヘルスの名前と作品しがばしば勝手にあてこすりの対象とされ、安易に解釈され、単純すぎて変形されるよりは曲解されることが多い、とつけ加える必要がある。これは勿論、ミヘルスほどの明暗を示す人物は少ないという事実のせいでもある。そのうえ、この明暗とは彼の生き、活動した時代背景、複雑で矛盾にみちた背景のもとではめこまれたものである。ミヘルスは、ドイツの国民統一過程と〈列強〉としての成長の頂点の時期、1876年に生まれ、不吉なヨーロッパのファシズム全体主義——まだ当時は上昇気流に乗っていたが——の発展の頂点の時

期、1936年に死んだ。

社会主義者＝ミヘルスとファシズム＝ミヘルスという微妙だが乱用されすぎた関係を強調することには余り興味が無い。もっと興味深いのは、例えば、経済学的関心と政治学的関心の交錯を示唆することであろう。もしくは、抽象的なカテゴリーによる合理化のための分類方法と生活の日常的側面の社会学的読み方に対する細心の注意との交錯である。ここから、あるミヘルス像が出てくる。即ち、19世紀から20世紀にかけて、結局は、ドイツの社会学者がその最も正確で貴重な指標となったような大きな〈危機〉、そのような危機の解釈者でありその全体的な表現者として、ミヘルスが引き受けた役割にもっと見合ったミヘルス・イメージが生まれてくるのである。

本書——1986年5月30日トレントで催されたミヘルス学界で行われた議論を集めている——はミヘルスの多面的性格を余すところなく確定的に再現したと自負するものではない。その逆で、それらの明らかな断片性こそが、ある意味で、方法的な選択を示している。現代の社会科学の領域でこの偉大なドイツ系イタリア人社会学者が果たした役割の総決算をするという——いずれにしても誰かが始めねばなるまいが——総括的な仕事にとりかかる前に、新しい興味と研究を触発するために、ミヘルスという大きな織物の周縁の部分論ずる方が選好されている。

ところで、決してミヘルス研究の専門家でもないし、従って本書にも寄稿しなかった一部外者に総括的な評価を下すのを許してもらえらるなら、ここにおさめられた研究からは一つの共通の横系が浮かび上がるようだと言いたい。それはミヘルスの〈政治学的〉関心を際立たせるものであり、いずれにしても、ミヘルスを今日優勢な政治学的関心の光の下で解釈するよう求める横系である。同じことだが、研究対象の特徴と研究主体を突き動かす性格とを区別するのは非常に難しい。社会学から政治学へ、この道程は短い。しかし、問題が発展なのか、

それとも後退なのか、それを見極めるのは難しい。それはミヘルスにとっても、今日にあって重要なことである。⁽²⁾

従来ミヘルス研究者が関心を寄せ、その解釈にこれつとめてきたテーマはスフェーラも触れているように、社会主義者＝ミヘルスとファシスト＝ミヘルスとの「微妙だが乱用された関係」という問題であった。戦後ドイツで発表された初の総合的なミヘルス研究は『ロベルト・ミヘルス。社会主義－サンディカリズム的信条からファシズム的信条へ』⁽³⁾（レーリヒ、1972）と銘打たれていたし、英語で書かれた代表的なミヘルス政治思想の研究論文も「社会主義からファシズムへ。ロベルト・ミヘルスの著作における理論と実践の関係」⁽⁴⁾（ビーサム）というものであった。それ自体は非常に興味深いテーマであり、イデオロギーとしてのファシズム研究でも重要な分野をなしていることは確かである。⁽⁵⁾ またこの広い意味での転向が、ミヘルスを一躍有名にした「オリガーキーの鉄則」命題と深くかかわっていることも事実である。⁽⁶⁾ しかしこの視点からだけではミヘルスの全体像は見えてこない。先の序文でも言われているような多面的なミヘルス像はつかめない。実際彼の関心対象は政治と社会に止まらず、経済と経済理論、イタリアの労働・社会主義運動、そしてイタリアの帝国主義とファシズム、はてはフェミニズムと演劇というように甚だ広範囲にわたっている。従ってオリガーキー命題も彼の思想全体の中で位置づけ直す必要があろう。そしてこういうミヘルスの全体像が明らかにされて初めて、当代ヨーロッパの思想的〈危機〉の「全体的表現者」としての意味も把握出来よう。

ところで、ここで「青年ミヘルス」とはいつまでを指すのかという年代問題が生ずる。ミヘルス自身が1932年の自伝的論文「ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流（1903-1907）」⁽⁷⁾でも暗示しているように、1907年頃が転機であったとみてよい。ミヘルスの死後彼の著作目録を作ったクルチオは次のように分類した。⁽⁸⁾

1900—1907：社会主義者・サンディカリスト

1907—1914：トリノー大学教授

1914—1928：バーゼル大学の経済学教授

1928—1936：ペルージャ大学の経済学と協同経済学の正教授

しかし、履歴による分類は思想史研究にほとんど意味をもたない。またすべての自伝と同じくミヘルスの先の論文も、いくら三人称形式で自己を語っているとしても、過去の偽造の疑いを払拭できない。⁽⁹⁾ 本稿では、彼の名著『政党の社会学』が書かれた1911年頃までを射程に置いておく。いうまでもなく、思想はある日突然、例えば社会主義からエリート論へと変わるというものではない。

さて本稿の叙述は編年体形式をとる。ミヘルスのように多くの分野に関して著述活動を続け、しかも、時代とともにそのスタンスに微妙に変化がみられる思想家の場合、研究とその表現には幾つかの方法が考えられる。リンスの古典的なミヘルス紹介のように、ミヘルスの性格の特徴——主意主義——を通奏低音にして、彼の多様で変転する思想表現を解釈していく方法が一つ。彼は先ず、ミヘルスの社会主義運動の研究は彼自身の党内体験がベースになっていることに注目する。これはよく知られた事実である。「しかし」とこう続ける、「彼のコミットメントは単に知的な関心からのみ動機づけられていたのではない。それは彼の情熱・行動・青春・結果を問わない原則・そして象徴的ふるまいへの偏愛と関係している。事実彼の初期のスタンス——彼の主意主義的な世界観への知的発展——は、後のファシズムとの親近性の基礎であった。彼の政治生活は、もし『政党の社会学』を失望した民主主義者とか幻滅したドイツ社会民主党員の仕事としてのみ読むなら連続性と一貫性に欠けているように見える。実際は、サンディカリスト＝ミヘルスの生涯の方が、純粋にマルクス主義的な社会主義者＝ミヘルスの生涯よりも納得いくのである。……彼の生涯は、挫折したロマン主義的な政治家、帰化した国の愛国者そして学究の生涯であった。それは、何人か⁽¹⁰⁾にもいるが、忠誠の相剋と20世紀初頭の知的環境を反映しているのである。」 また、ミヘルスの「個人史的データと心理的動機」から、とりわけミヘルス＝ブルジョア背教者とミヘルスにおける「国際的社

会主義からイタリア民族主義へ」という二つの転向を解釈する仕方が二つ。⁽¹¹⁾
ミツマンの『社会学と疎外』⁽¹²⁾ (1973) がその代表であろう。

ところで我が国では主著『政党の社会学』以外にミヘルスの著作はほとんど知られていない。というより、青年ミヘルスを初めてとりあげたミツマンもいうように——そしてこれは日本以外でもほぼ同様だが——「今世紀の最も複雑な社会理論家の一人」であるミヘルスがこの『政党の社会学』一冊によって知られ、そのうえマキャヴェリアンとかせいぜい幻滅した啓蒙の使徒と規定されてきたのである。また彼の多くの論文とエッセイは、あまり知られていない雑誌に埋もれており、これが研究の第一の障害となっている。⁽¹³⁾従って、ミヘルスの思想的な位置づけやその歴史的意義という結論的評価の問題究明の前にミヘルスの多面性をそのまま紹介する必要性が感ぜられる。またミヘルスの思想的発展を時間的に跡づけるためにも編年体形式が相応しいように思われる。

第二に、思想的発展——とくに〈転向〉——を扱う場合、しばしば結果から過去を読み込むという方法がとられる。青年ミヘルスのなかにファシスト＝ミヘルスの萌芽を探し出すという問題意識である。それ自体一つの視点として重要ではある。しかし、先にも触れたように、この視野から離れたミヘルスは初めから研究対象の外に置かれてしまう。本稿は青年ミヘルスの思想内容の全体像を内在的で等身大の視点からいわば接写することを意図する。

注

- (1) この10年ほどのあいだにアンソロジーと研究論文集がそれぞれ3冊ずつ出版されている。*Michels. Antologia di scritti sociologici*, a cura di G. Sivini, Bologna, 1980; *Robert Michels: Masse, Führer, Intellektuelle-Politisch soziologische Aufsätze 1906-1933*, Mit einer Einführung von J. Milles, Campus Verlag, 1987; *Roerto Michels. Potere e Oligarchie. Antologia 1900-1910*, a cura e con introduzione di Ettore A. Albertoni 1989. であり、研究論文集は次の3冊である。*Roberto Michels: tra politica e sociologia*, a cura di B. Furiozzi, 1984; *Atti del Convegno su Roberto Michels nel 50 anniversario della morte*. (Trento, 30. 5. 1986) *Analli di Sociologia/*

- Soziologisches Jahrbuch* 2. /1986-I. Universita degli studi di Trento ;
Roberto Michels : Ecomia Sociologia Politica, a cura di Riccardo Faucci,
 1989.
- (2) *Atti del Convegno su Roberto Michels nel 50 anniversario della morte.*
 (Trento, 30. 5. 1986) *Analli di Sociologia/Soziologisches Jahrbuch* 2. /
 2986-I. Universita degli studi di Trento, p. 11-12.
- (3) Röhrich, W. : *Robert Michels. Vom sozialistisch-syndikalistischen zum
 faschistischen Credo*, 1972.
- (4) D. Beethem : Michels and his Critics, in *Archives Europeennes de
 Sociologie* XXII, 1, (1981).
- (5) cf. David D. Roberts, *The Syndicalist Tradition and Italian Fascism*,
 1979 ; A. James Gregor, *Italian Fascism and Developmental Dictatorship*,
 1979.
- (6) この問題に関する筆者の暫定的な見解としては次を参照せよ。氏家伸一「デ
 モクラシー、オリガーキー、ファシズム—ミヘルスの転向」『現代民主主義と歴
 史意識』勝田吉太郎先生退官記念論集, ミネルヴァ書房, 1991年。
- (7) Michels, "Eine syndikalistisch gerichtete Unterströmung im deutschen
 Sozialismus (1903-1907)" (1932), in, *Robert Michels : Masse, Führer,
 Intellektuelle-Politisch-soziologische Aufsätze 1906-1933*. S. 68. もとは
Festschrift für Carl Grünberg zum 70. Geburtstag, Leipzig, Hirschfeld,
 S. 343-364 に発表された。
- (8) Carlo Curcio, "L'opera politica di Roberto Michels", in *Studi in
 Memoria di Roberto Michels* Annali della Facolta di Giurisprudenza,
 Vol. XLIX-1937-Serie V-vol/XV, R. universita degli Studi di Perugia.
- (9) シヴィーニはこの論文を「サンディカリストの経験をファシズムの展望の中
 に復位させる」試みと判定した。"Introduzione" in *Michels. Antologia di
 scritti sociologici*, a cura di G. Sivini, Bologna, 1980, p. 9, n. 6. この問題
 の詳しい検証としては次のフェッラーリスの研究を参照。P. Ferraris, "Roberto
 Michels politico (1901-1907), in, *Quaderni dell'Istituto di studi economici e
 sociali*, [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino] 1/1982, p. 23-27.
- (10) Linz, J. J. : Roberto Michels, in : D. Shills (ed.) *International Encyclo-
 pedia of the Social Science* vol. 10, 1968, p. 266.
- (11) Pfetsch, F. R. Einleitung zu Roberto Michels, *Zur Soziologie des
 Parteiwesens in der modernen Demokratie*, Vierte Auflage, 1989. S. XXI.
- (12) Mitzman *Democracy and Estrangement. Three Sociologists of Impe-
 rial Germany* 1973.
- (13) *idem*. p. 268. 森・樋口訳『政党の社会学』木鐸社, I, II, 1973, 1974への

森博の「訳者後書き」にミヘルスの主な作品の目録がついている。また邦訳文献では氏家訳での「ロベルト・ミヘルスの同時代人論」として、モスカ、パレート、デ・アミーチス、ロンブローゾ、ウェーバー、ベーベルに関するミヘルスの文章の拙訳がある。『神戸学院法学』第14巻第4号1984年～第20巻第3・4号1990年。

第1章 1901年：ケルン—生い立ちと出発

『政党の社会学』第3版(1957年)への序文で編者ヴェルナー・コンツェは「本書のテーゼは、ある程度、著者の特別な人生体験から説明することができ、現代政治と政治科学のある特定の発展段階が、考察の基礎にあるといえる。しかし、ミヘルスによって分析された現象と関係は、いまなお基本的な現実性を持って⁽¹⁾」いると述べて、本書を一躍有名にしたオリガーキーのテーゼの妥当性の普遍性と相対性を指摘している。したがって本稿の課題——ミヘルスの編年の思想史研究——にとっては「著者の特別な人生体験」への言及を避けるわけにはいかない。といって、先にも触れたように、思想や諸命題を時代的、心理的、家庭的環境へと還元させることはできない。

ミッツマンやレーリヒをはじめミヘルスの思想の形成過程を考察する際に必ず取り上げられる自伝的文献が二つ存在する。「ペーター・ミヘルス——ラインの産業・政治・社会生活における彼の活動⁽²⁾」(n. 584, 1930)と先に触れた「ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流」(n. 618, 1932)である。後者は1903年前後の初期ミヘルスの思想的立場とその環境を知るうえで非常に有益である。前者はミヘルス思想の生成の背景を示唆してくれる。「底流」論文は森博氏による詳細な紹介があるので、ここでは触れず、後に批判的評価が必要になる時に言及することになる。

「ペーター・ミヘルス」論文は「ラインの生活を描こうとするなら彼ら(ペーター&コンスタンツェ・ミヘルス)を不注意にも見過ごすことは許されない」という文章をスローガンに掲げている。ペーター・ミヘルス(1801-1870)はロベルト・ミヘルスの祖父であり、彼が死ぬまでにはケル

ンでも有数の富裕な商人となった。ペーターの父マティアスも羊毛業で富を築き、公的生活でも活躍した同市の「一級市民」の一人であった。ペーターはそれを引継ぎ一層発展させたわけである。要するにミヘルス家はケルンでも随一の富裕なブルジョアであり、したがって名門であった。このことはミヘルスの最初の転向との関係でも銘記に値する。

ところでペーターの妻、すなわちロベルト・ミヘルスの祖母コンスタンツェ・ヴァン・ハーレンの一家は自分達をベルギー人と感じていたようだが、むしろ、民族意識が非常に低かったと言った方が正確のようである。これは当時のカトリックに普通のこと、コンスタンツェもフランス語を母国語と同じようにあやつった。ヴァン・ハーレンの姻戚関係はベルギー、ライン、西フランスそしてスペインにまでおよんでいたとされる。コスモポリタンなミヘルス家の伝統はコンスタンツェンに始まっている。しかしこの点にかんしては19世紀のケルンとラインラントの歴史的特性に注目すべきである。ミヘルスはそれを説明するためにエンゲルス——ミヘルスはマルクスと勘違いしている——の文章を引用している。それは1849-50年に書かれた「ドイツ国憲法戦役」と題する論文の一節である。

「ラインプロイセンは、1815年以来ドイツのもっとも進歩した州の一つとみなされてきたが、これは当然のことである。ラインプロイセンは、ドイツの地域もあわせもたない二つの長所を兼ねそなえている。

ラインプロイセンは、ルクセンブルク、ラインヘッセン、プファルツとともに、1795年以来フランス革命を体験し、さらにナポレオンの支配下で、この革命の成果が社会的、行政的、立法的に確立される過程をともしたという有利な点をもっている。パリで革命党が敗れたときに、軍隊は革命を国境を越えてもちはこんだ。これらの解放されたばかりの農民の子弟のまゝに、神聖ローマ帝国の軍隊だけではなく、貴族と僧侶の封建支配もまた瓦解したのであった。この二世代のあいだ、ラインの左岸はもはや封建制度を知らない。貴族はそのの特権を奪われた。土地所有は、貴族と社会の手から農民の手に移った。土地は分割され、農民はフランスにおけると同様に、自由な土地所有者となった。都市では、自由競争のまゝに、同職組合と都市貴族の家父長制的支配とが、ドイツの他のどの地方よりも10年はやく、消えてなくなった。最後に、ナポレオン法典が、革命的諸制度全体の総まとめとして、変化した全秩序を確認した。

第二に、ラインプロイセンは、——そして、この点が、ライン左岸の他の諸地方にくらべて、ラインプロイセンがまさっているおもな点である——全ドイツでもっとも発展した、もっとも多様な工業をもっている。アーヘン、ケルン、デュッセルドルフの3県には、ほとんどあらゆる工業部門が存在する。ここでは、木綿、羊毛、絹を加工する各種工業、およびそれに依存する漂白・捺染・染色の諸部門や、鋳鉄業、機械工業、さらに鉱業、兵器鍛工場、その他の金属工業が、数平方マイルの地域に集中されていて、ドイツではこれまでみられなかったほどの稠密な人口がこれに従事している。ライン州にすぐ接続して、マルクの鉄鉱および炭田地帯があり、ライン州に原料の一部を提供し、また工業上その一部となっている。ドイツ最良の水路をもっていること、海に近いこと、この地方が鉱産資源に富んでいることは、工業にとって有利である。工業はさらに多くの鉄道をつくりだしており、この地方の鉄道網を日ごとにいっそう完備しつつある。また、ドイツとしてはいちじるしく大規模な、世界各地を相手とする輸出入貿易、世界市場のすべての貨物大集散地との大量の直接取引、比較的に発展した原料および鉄道株の投機が、工業と相互に作用しあっている。要するに、ライン州の商工業の発展度合いは、世界市場ではかなりめだたないものであっても、ドイツとしてはこれにならぶものはない。

ラインプロイセンで、このように工業——これはまた革命フランスの支配のもとで開花したものである——と、この工業に結びついた商業とが発展したことの結果は、有力な商工業の大ブルジョアジーと、それに対立する多数の工業プロレタリアートとがつくりだされたことであった。この二つの階級は、ドイツの他の地域では、きわめて局地的に、萌芽として存在するにすぎないが、ライン州では、この両階級が、この州の独特の政治的發展をほとんどもっぱら規定している。

ラインプロイセンは、フランス人によって革命化されたドイツの他の諸地方にたいしては、工業をもっている点でまさっており、ドイツの他の工業地帯（ザクセンやシュレージエン）にたいしては、フランス革命をとおってきた点でまさっている。これは、その社会的發展がほとんど完全に近代ブルジョア社会の水準に達した、ドイツでただ一つの地域である。ここには、発展した工業、大規模な商業、資本の蓄積、土地所有の自由がある。都市では有力なブルジョアジーと大量のプロレタリアートが優勢を占め農村では負債を背負った多数の分割地農民が優勢を占めている。ブルジョアジーは、雇用関係をつうじてプロレタリアートを、抵当債権をつうじて農民に、競争をつうじて小ブルジョアジーを支配しており、最後に、商事裁判所、工業裁判所、ブルジョアの陪審裁判、および実定法全体が、ブルジョアジーの支配を確認している。

いまや読者は、プロイセンという名のつくあらゆるものにたいしてライン州人が憎しみをいだいているわけを、理解できたであろうか？ プロイセンは、

ライン州人を自国内に編入することによって、フランス革命をも自国内にとりこんだのであった。そしてプロイセンは、ライン州人を、被抑圧者や異国人のように取り扱うだけにとどまらず、征服した反徒のようにさえ取り扱った。ますます発展しつつける近代ブルジョア社会の精神でラインの立法を完成してゆくどころか、もはやヒンターボンメルンにさえほとんど適合しなくなったプロイセン普通法というペダンティックで封建的に素町人的な混ぜものを、ライン州におしつけようとさえしたのである。

1848年2月以降の激変は、ライン州の例外的な地位を明白に示した。ライン州は、プロイセンのブルジョアジーだけでなく、全ドイツのブルジョアジーに、かれらの古典的代表者であるカンプハウゼンとハンゼマンを供給した。また、ドイツのプロレタリアートに、空文句や善意によるだけでなく、彼らの現実の⁽³⁾利害に応じて彼らを代表する唯一の機関誌、『新ライン新聞』を供給した。」

ミヘルスは、ここには「宗教的動機」によるラインとプロイセンの反目の問題が描かれていないと評しているが、経済・社会史分析としては的確であろう。ミヘルスが長々と引用したのも頷ける。要するに、ライン州はドイツで最も資本主義の進んだ地域であり、政治的にも近代化が行われていた。ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立も顕在化していた。ライン州人の自由意識は反プロイセン意識をかきたてた。ミヘルス家のコスモポリタニズムの背景にはこのケルンとライン州特有の歴史が存在するのである。

さて、ところでケルンの高等学校には「ベルギー、エルザス・ロレーヌ、ワロン、フランク、ヘッセン、シュヴァーベン、ポメルン、ザクセン、チューリンゲン、ポーランド」の学生たちが通っていた。ケルンの街にはフランスやイタリアからの移住者も多かった。決定的なのは1794—1814年の「ケルンのフランス時代」(S. 31)であり、その伝統は60年代まで生き続けており、「ナポレオン崇拜」はほとんど一般的だった。「それに対し〈プロイセン〉はほとんど愛されず、〈プロイセン〉という言葉で彼らは何よりも軍隊をイメージした。軍隊が行進していくと、1950年代末までは、〈ほらプロイセンが来た〉と叫ばれていた。当時軍隊にはほとんど共感が寄せられていなかった。」(S. 31) プロイセン主義——「官僚と軍隊そし

てそれとつながる土地貴族特有の物の見方」(S. 41)——はライン魂とは全く別ものであった。ライン人は「自己の文化的優越性を確信」していた。しかし、「プロイセン主義的な見方」がしだいにラインの社会に浸透してきたことも注記されている。いずれにしても「プロイセン主義の原動力の一つは軍人的精神」であり、それは実業とは無縁であった。従ってライン人の反プロイセン主義は反軍国主義にも通じていたのである。

1866年の普墺戦争に際してケルンを支配していたのは「プロイセンが悪い」という感情であった。(S. 60) その理由としてミヘルスは三つあげている。

- (1) 「一般的な平和愛好心」
- (2) 「プロイセン国家とその政治に対する一般的な反感」
- (3) カトリック的連帯感

この戦争は「ドイツ人のカトリック分子の対する内戦」という一面をもっていた。

ミヘルスは「ライン魂」という節でこう書いている。「ケルンの人間については多くのことが書かれている。外の人にはそれを正当に評価してこなかった。多分ライン系ドイツ人の本質には南のゴールの、ローマ的な異質な特質が多く混っていたからかも知れない。それらは東の住人のほとんどすべての判断では非本質的と感ぜられたにちがいない。」(S. 70) ミヘルスは祖父のペーターを「生粋のラインラント人」とか「真のケルン人」とよんでいる。

最後にペーター・ミヘルスにおけるカトリックと家父長制の問題に触れておこう。彼は極めて熱心なカトリック信者であり、孫のミヘルスは彼と妻の善行喜捨、カトリック系職人のための宿舍、扶助協会の設立等の例を数多くあげている。自ら質素な生活を旨としただけでなく、苦しんでいる隣人には援助を惜しまなかった。極めつけは最晩年にペーターの肝入りで建設された(1864年)重病入用のマリエン病院であろう。これによってペーター・ミヘルスはケルン史に長く名を残すようになった。彼の利他主

義を端的に表す文章は1864年に妻へ書いた手紙の一節であろう。「私の生涯で、人が自分に認めることのできる最大の利己主義、最大の幸福とは他人を幸福にすることであるということわかった。」(S. 97)⁽⁴⁾

9人の子供をもうけたペーターの世界観は家父長制であった。(S. 32)当初10人ほどいた使用人も家族と寝食を共にし、一種の「共同の生活」(S. 34)を形成していた。これは階級対立を緩和する作用を果たしたとミヘルスは評している。ところで家父長制は階級対立を緩和すると同時に隠蔽しているのであり、同じく女性支配をも隠蔽しているのである。フェミニズムが絶えず家父長制を問題視するのも当然である。1930年のミヘルスはこの点には触れていないが、先にも示唆したように青年ミヘルスにおいては重要なテーマであった。

ペーター・ミヘルスが活躍した「カトリック、コスモポリタン、平和主義、反プロイセンのケルンの小さな世界」⁽⁵⁾も1876年のロベルト・ミヘルスの誕生の頃には崩壊の憂目を迎えていた。一つは1848年の後、この地の自由主義ブルジョアが消滅しつつあったこと、二つには、プロテスタントの上層中間階級の支配権が優越し始めたことによる。統一ドイツ国家の成立に伴うプロイセン化の結果であろう。

以上、「ペーター・ミヘルス」論文によって19世紀ケルンとミヘルス家の歴史を簡単に紹介したが、これはあくまでロベルト・ミヘルスの思想形成の一つの与件でしかない。ミヘルスの意志と決断と選択がこれに加わり彼の人生と思想が出現する。

ミットマンはその優れた青年ミヘルス研究で「旧都ケルン社会の独特の自由の信念の多くがロベルト・ミヘルスの初期の作品でも革命的教義の⁽⁶⁾たちが再び現れていることには議論の余地がない」と書いている。フェッラーリスもこの「自由の信念」が「青年ミヘルスを熱狂させ悩ませた中心テーマ」であったことを認めている。そしてフェッラーリスによればミヘルスにおいて、経済的には近代化を遂げはしても政治的には後進的なドイツで、この自由主義を担えるのは社会主義運動でしかなかった。⁽⁷⁾

青年ミヘルス (1902-05) の中心的な理論作業は「平和主義, 国際主義, 民族自決権という彼の社会道徳の三つの中心要素のための一つのイデオロギー的枠組みを発見することである」⁽⁸⁾としたミッツマンを批判して, フェッラーリスは青年ミヘルスの中心テーマはドイツにおける自由主義と民主主義の成熟にあったとする。しかも, そのためには単なる憲法と制度の変革ではなく, 思想と習慣, ライフスタイル, 家族や様々の社会制度の変革そして市民の活性化が必要なのであり, そして, 「軍国主義的, 官僚主義的ヒエラルヒー秩序の全能によって押しつけられた従属的受動性を打破すること」⁽⁹⁾が重要なのである。このフェッラーリスの解釈はミヘルスの戦略的関心の広さを説明してくれて興味深い。

ところで少年・青年期のロベルト・ミヘルスの伝記的事実について興味深い文書がのこっているのでここに紹介しておこう。これは1907年にトリノ大学の経済学講師に就職する際に提出した履歴書⁽¹⁰⁾である。

履歴書

私, ロベルト・ミヘルスはケルン (プロイセン, ライン州) で1876年1月9日, 商人で陸軍予備役将校で騎士勲章佩勲者のジュリオ・ミヘルスとケルンの参事ロベルト・シュニッツラーの娘アンネ・シュニッツラーの子として生まれた。

基礎教育は母から受けた。1885年ベルリンのコレージュ・フランセーズ (フランス人の創設になる高等学校 Ginnasio-liceo。そこでは全教育がフランス語で行われる) に入学, 3年間に在学する。

1888年から1895年までアイゼナッハ (テューリンゲン州) のカール・フリードリヒ高等学校に通い, ここで大学入学資格を得た。

適時必要な試験 (これには自主的にギリシャ語とイタリア語をも加えた) に合格し, 陸軍の士官学校に入る (1895年) ザクセン大公連隊で1年勤務した後, 私はハノーバーの「戦争学校」に入る。帯剣士官候補生に昇格したが, 学問的研究に専心したくなり退学する。

1897年から1900年まで、イギリスへの研究旅行の後、経済学、歴史学、ラテン語、東洋語そして刑法学をパリ、ミュンヘン、ライプツィヒ、ハレの大学で学んだ。

1900年歴史学・経済学の博士となる。(ドイツではヴィッテンベルクのハレ大学で哲学部に籍を置く。)学位論文のテーマは「フランスのルイ14世によるオランダ進入の原因」であった。その歴史的部分が印刷された。そしてハレ大学の講堂で以下のテーマで講演した。

- (1)フランス・ルイ14世がネーデルランド共和国に対して行った戦争は間接的にはスペインに向けられていること。
- (2)1672年のフランス軍によるライン河渡河は、当時もその後の著作家も主張したほど容易ではなかったようであること。
- (3)神聖ローマ帝国の皇帝たちの「賞賛 laudatio」は「恥 Delobung」と同意義か同じものと見なされていたこと。
- (4)人口増加がインフォーマルにもたらす災厄を償う最も容易な方法は国内植民に求められるべきであろう。
- (5)現在フランスで行われている穀物税は想像以上にフランス経済に打撃を与えている。

私は卒業前に既に、経済学関係の講演を二つ、一つは「フランスにおける Jobs Law (?) の教訓の原因と結果」に関してハレ大学のラボラトリーで、二つ目は「フランスにおける1675年までのクロベール主義」と題して行った。

1900年ハレ大学の歴史学正教授テオドール・リントナーの娘で経済問題の評論家のギーゼラ・リントナーと結婚。

1900年から1902年にかけては、社会と歴史の研究のためにイタリアで過した。1901年の冬はトリノの文書館に通った。1902年から現在まではヘッセンのマールブルクに滞在して、社会と経済の研究に勤しんでいる。といってもドイツ、フランス、オランダ、ベルギー、そしてなかならずイタリアへの研究旅行のためしばしばマールブルクを留

守にした。

近年私が行った講演と講義は以下の通り。

1904年（冬）：フランクフルト・アム・マインの人民大学で純粹経済学の講義。

1905年：ブリュッセル「新大学」Université Nouvelle で「19世紀における社会主義の諸潮流と労働者党の歴史」の講義。

1906年：パリ社会科学自由大学 Collège Libre des Sciences Sociales (Hôtel des Sociétés Savantes) で「ドイツにおけるマルクス主義」について講演。

私の寄稿した雑誌を以下に挙げさせていただきたい。

“Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik”. (ヴェルナー・ゾンバルトとマックス・ウェーバー編集)

“Kritische Blätter für die Gesamten Sozialwissenschaften”, Berlin,

“La Riforma Sociale”, Torino.

“Dokumente des Sozialismus”. (エドワルド・ベルンシュタイン編集), Berlin.

“Die Ethische Kultur”, Berlin.

“Le Revue de Sociologie”, Parigi, (Rene Worms 教授編集).

“Tilskueren”, Copenaghen, Direttore……?

“Die Neue Zeit”, Berlin.

“Magazin für Litteratur”, Lipsia.

“Huszadik Szazad”, Budapest,

“Die Anthoropologische Revue”.

本申請者に、私の陳述の真正なることを証明する13の文書と、私の学問と文章の能力を実証するいくつかの出版物をつけ加えることをお許し願いたい。さらに、Archivの次号に出版される予定の「イタリア

におけるマルクス主義の歴史。批判的、歴史的、文献学的試論」という、もとのより拡大された研究のゲラは手に入り次第送付させていただきます。

私は何年も前からイタリアに愛着を感じてきました。それに病気にも悩まされて私のドイツ在住がほとんど耐えられなくなってきました。現在やっと「19世紀後半のイタリアにおける経済学」についての本を書いております。そのためにもイタリアに居住を移すことを余儀無くされています。そのような私はトリノ大学の経済学の教授資格を申請することに決心した次第です。

ロベルト・ミヘルス

ヴィッテンベルク、ハレ大学の哲学博士。

国際社会書誌研究所（ベルリン）の組織委員会委員

パリ社会学界会員

ブリュッセル新大学講師

Archiv für Sozialwissenschaft [und Sozialpolitik……?] の
定期的寄稿者

ミヘルスの著作活動は先の履歴書にも触れてある学位論文「フランスのルイ14世によるオランダ進入の原因」の一部「ルイ14世によるオランダ進入の前史」(1900年) (n. 1.)⁽¹¹⁾を別にすれば、1901年に始まる。青年ミヘルスは学術論文というよりジャーナリストとしての記事や評論の文章を多く書いている。またその才能も人並み以上あったといっても過言ではない。1901年の仕事としては4つの文章が残っている。青年ミヘルスの関心のありようを既に示している。この時点ではフェシズム、社会主義、文化社会学と分類できる。これらからうかがえる政治的立場はさほど鮮明ではないが、広い意味で左翼民主派とでも呼べよう。方法としては厳密な唯物

史観とマルクス主義というより実証主義的な社会学的分析といえよう。

最初の論文「ドイツにおける社会問題」⁽¹²⁾はイタリアのトリノで出されている *La Riforma Sociale* に発表された。それは次のような象徴的な文章で始まっている。「現今のドイツを悩ませている社会問題の中で最も重要だが、もっともないがしろにされているのは、疑い無く女性問題である。」(P. 775)しかしドイツではこの問題への取り組みが非常におくれているとミヘルスは言う。「フランス人の道徳的腐敗」に対して「ドイツ人のいわゆる貞節」が唱えられるがそれは事実と合わない。彼はその証拠としてパレート——数年後に深く傾倒することになるマキアベアベリアン——による、非嫡出子の統計的比較を引き合いに出している。女性問題は貧富や未・既婚によって異なった様相を示し、その解放の敵も異なってくる。⁽¹⁴⁾いずれのレベルでもドイツはたちおくれている状況が暴露される。また女性問題と階級関係については「勤労女性はより困難で過酷な、そして持続的な闘いをせざるを得ない。自分たちの性の解放のために戦うのみならず、男性と連帯して自己の階級の解放のためにも戦わねばならない」と指摘する。ミヘルスはこれを「第二の闘い」と呼び、その議論はベーベルの『婦人論』⁽¹⁵⁾にまかせている。「第一の問題」は女性が「労働市場」に競合者として登場した時に発生する。前者が経済と階級のレベルとすれば、後者は性差と社会的差別のレベルとなる。ドイツでは女性の社会進出、組織化、教育チャンスがおくれている。それに対して英米では、教育の成果もあって、女性の経済的、教育的活動への参加が多くみられる。ドイツでは女性のストライキに男性が反対する。ドイツの女性労働者のおかれた状況は、しばしば売春を余儀無くさせるほど悲惨である。(ベルリンには6万人いるとされる。)それはドイツにおける女性一般の低い地位と国家による放置の結果であるとミヘルスは指摘する。ドイツ女性の「あきらめるほどの無知」は教育の貧困に原因がある。たとえば女性の大学進出は英米でもっとも早く、イタリアでも1876年、ポルトガルと日本でも1880年頃に始まったとされる。1900年の法律で女性の大学進学が認められたものの、実質

的には教授の裁量にゆだねられている。いわんや女性の教授など考えられない。

女性の低い地位は家庭内で顕著である。そして家父長制イデオロギーを掲げるドイツ民法が非難される。男性は「主人」である。たとえ「世間の偏見」に強いられて結婚したとしても、愛の無い結婚は売春よりも「恥辱」である。売春には売るのを拒む「権利」があるからである。ミヘルスは女性解放の原則は「女性の経済的自立が彼女に一種の道德的独立性を与えるであろう」という、個人主義的なものである。性と道德の関係がミヘルスの重要なテーマであることをここで銘記しておきたい。⁽¹⁶⁾ともあれ本論文の問題意識は、まず「ドイツにおける女性の状況」を報告し、そしてこう問うことであった。ドイツは「芸術、産業、文学、科学の分野」では発達しているのに、「なぜ女性問題が我が国ではおくられているのか。」ミヘルスはその理由を二つあげている。第一は「女性自身の気質」にもとめられる。「フェミニズム運動に敵対する男性は一般にこういう。女性自身が女性解放の第一の、そして強力な敵である、と。こういう主張への同調者は特に国民の上層階級に多い」(P. 790.)ドイツの女性は「男性の権利」を盲信している。政府、マスコミ、政党(SPDを除いて)はフランスやイギリスほど「女性の解放」に対して好意的ではない。さて、第二の理由はこの問題への国家の「疑い深い」姿勢である。というのも国家はフェミニズムに「革命的幻影」を見ているからである。いずれにしても「女性の政治的平等を拒否し、女性を国家と社会の独立した人格として認めないのは最も由々しい誤りであり、不正である」(P. 791)と、ミヘルスはドイツの体制と国家を弾劾する。女性の政治参加はアングロ・サクソンに比べるとはるかにたちおくられている。従って、とミヘルスはこの論文を結んでいる、「ドイツのフェミニズムの闘いでのおわずかの進歩でも、将来の経済学者にとっては、どんな植民政策や世界政策の決断よりもはるかに価値ある仕事となろう。」(P. 792)

ミヘルスは1901年にイタリア語で二つの小さな文芸社会学的評論を書い

ている。「ドイツにおける喜劇」(n. 3)と「ドイツの現代劇」(n. 4)⁽¹⁷⁾である。両者に共通しているのは、先の論文にもみられる比較という方法である。第3論文ではイタリアとドイツの民族的劣等感をあげ、とくに政治・軍事・芸術・文芸ではフランスがモデルであったとのべている。ドイツでの喜劇はあくまで娯楽のための喜劇でしかなく、逆に「深刻なドラマ」はドイツでは拒否される。ここでのミヘルスの狙いは観衆(大衆)の社会学的、心理学的分析である。アーサー・シュニッツラー等の社会派現代劇は大衆の日常的問題をとりあげるために、かえって反感を受ける。ドイツ大衆は劇場を楽しみに来るのであって、悩みにくるのではない。シリアスな現代劇を阻害する要因の第一はまさにドイツ大衆の生活と精神にある。第二は政治的である。すなわちドイツでは保守主義者のみならずリベラル派も「民族の神聖な財産」を危うくするとして、この現代劇を拒否する。これがミヘルスの反プロイセン主義に触れてくる。「民族の神聖な財産」とは実は「教会と兵営と軍艦の三位一体」にはかならない。こういうイデオロギー的土壌では古典的なシラーの「社会派ドラマ」に対してさえ「貧民をたぶらかす」ドラマという汚名がかぶせられるのである。青年ミヘルスの欺瞞を憎む正義感が伝わってくる。そのよって立つ基盤は自由主義と民主主義、そして人道主義と社会正義の混合物である。注意しておきたいのは、ミヘルスには青年時代から、プロレタリアート大衆を物神化していないという特徴である。これは彼における社会主義と社会主義分析にとって極めて重要な問題を提起してくるはずである。

さていよいよミヘルスのイタリア社会主義研究の問題に移ろう。ミヘルスとイタリア社会主義の関係は今まではほとんど研究されてこなかったテーマである。これにも理由が無いわけではない。青年ミヘルス＝サンディカリスト、壮年ミヘルス＝エリート論者そして晩年のミヘルス＝ファシストという若干ステレオタイプなミヘルス像が「政治的・イデオロギー的束縛」⁽¹⁸⁾を形成していた。わが国でも『イタリア労働運動史』(御茶水社、1970年)を書いた山崎功氏はミヘルスの著書『イタリア社会主義運動史』を再三

引用しながら、研究者としてのミヘルスに評価を下してはいない。1950～1960年代にイタリア労働運動史研究が再開されるとともにミヘルスの研究も再評価されるようになった。といっても当初は本国以外の国で見直されたといわれている。⁽¹⁹⁾ 今日では次のような評価が定着している。「ミヘルスはイタリア社会主義の最初の本格的研究者であり、彼の労働運動史への寄与は決定的である。それは必ずしも適切にフォローされていないし、ある面では今だに乗り越えられてはいない。」⁽²⁰⁾ わが国でも社会主義思想史家が「イタリア・マルクス主義の思想史的研究の先駆者」ミヘルスを再発見したのは1970年になってからである。⁽²¹⁾

ミヘルスの最初期の文章に「イタリア社会主義」(n. 5)⁽²²⁾と題するものが入っていることは象徴的である。ミヘルスはまず、名称としては社会民主主義より社会主義の方を選考すると宣言する。ドイツ以外では社会主義の方がよく使われているからという理由である。ドイツ語で書かれているとはいえ、ミヘルスは少なくともヨーロッパ規模の視点に立っているということが推測できる。そして比較の方法がここでも駆使される。

ミヘルスによれば、社会主義は北ヨーロッパにその起源をもっている。政党として強力なのはフランスとドイツで、前者では1840年代、後者では60年代に形成され始め、後にしだいに南欧、スカンジナビアそしてドナウ諸国へと急速に広がっていったとされる。ヨーロッパ南部は長い間この「新しい力強い政治的原動力」に閉鎖的であった。イタリアではスペインと同様アナーキズムとマッスィーニ流の急進主義的共和主義が「火山の爆発」のように体制に抵抗する唯一の形態であった。そして1880年代の初めにやっと、北の隣接諸国におけるこの「新しい救済理論」＝社会主義の華々しい印象と、イタリア語に訳されたラサール、マルクス、ルイ＝ブランの著作の影響のもと、イタリアにも社会党が形成されはじめることになる。1882年に経済学者でジャーナリストのアンドレア・コスタが初の社会党系国会議員として選出された。それを契機に「新しい信仰」としての社会主義は急速に成長していった。その速度はフランス、ドイツ、ベルギー、デ

122 (507)

ンマークよりも速い、とミヘルスは評している。「まるで、燃え盛る太陽が若い植物を予想できないほど急速に、高く成長させたかのようなのである。」(P. 493)

その理由をミヘルスはイタリアの国家統一期の「政治情勢」と政府の無力に求める。統一期に花開いた「輝ける未来」に対する愛国者たちの希望が無に帰したからである。イタリアは依然小国であり、大国から蔑ろにされる。これが国民の全階層に強い「憤慨」を呼びおこした。おまけに政府には「過去の偉大な活動の榮譽」も無い。ドイツやフランスではそれが「革命運動への対重」として現体制維持に役立っている。政治党派に「国の古い貴族的疾患」の一つでも取り除く能力は無いと国民に見られている。マフィアやカモッラは依然として乱暴狼藉を止めない。国権と教権の対立は国論を二分している。そして「大部分の官僚の腐敗」と「全土に見られる低賃金」、とくに後者は毎年多数の移民を余儀無くしている。「こうしてみると、イタリアにおける社会主義理念の急速な普及は驚くにはあたらないのである。」(P. 494)1882年に一名だった社会主義者の国会議員も1895年には15人、1900年には33人を数えることになる。いくつかの地方政府は社会主義者が権力を握っている。こうミヘルスはイタリア社会主義の盛況ぶりを報告し、続けて社会主義系の雑誌“La critica sociale”と新聞『アヴェンティ』に触れ、とくに後者については「外国の都市名と地名が誤植無しに現れるイタリアで唯一の新聞」(P. 494)と注記している。これはミヘルスの観察眼の特色を示しているだけではなく、外国の思想や文化をイタリアに移入する際の困難を示唆している文章である。現代の研究者も「ドイツ語についての無知がゆきわたっていた」せいもあって、「イタリアにマルクスの思想を普及させたのは、困難をきわめたのである」と認めているからである。⁽²³⁾

本エッセイは短いものながらイタリア社会主義の特性、ドイツのそれとの違いをドイツ人に知らせるという狙いをもっていた。さてその他の点、例えばイタリア社会主義の目標などについてSPD(ドイツ社会民主党)

のものと一致しているが、「未来国家の理想」の果たす役割は小さいとされる。一部は現世的・世俗的な心情が「遠い未来のあやふやなものより、確かな成果を追い求める」からかもしれないし、一部は、その理想が色褪せてしまったからかもしれない、と説明している。ミヘルスがイタリア社会主義にひかれたのが、その綱領的内容のためではないことがわかる。

1890年代からイタリアの階級闘争が激しくなり、20世紀初頭のイタリア資本主義の相対的安定期にもそれは弱まらなかった。1901年イタリア全土に広まったストライキ闘争は賃上げと労働時間の短縮を要求するものだったが、「従来の防衛的なそれから攻撃的な闘争にかわってきた」といわれている。⁽²⁴⁾ミヘルスはこの1901年の闘争についてこう書いている。「1901年初頭の最新の大きな賃金闘争は、一方でリーダーの熱心なプロパガンダと労働者の相互の無私の連帯が何をなしうるかを示し、政府が一旦公平に中立的立場に立つと、そのような闘争も充分に法の枠内で進みうることを示した。」(S. 495)確かにこの闘いは優勢に終わった最後のストライキ闘争であった。また引用文の後半部分はザナルデッリとジョリッティのいわゆる自由主義的な政府による巧妙な懐柔政策と、それに呼応するPSI(イタリア社会党)内にもしだいに台頭してきた改良派に関係している。続けてミヘルスは書いている。「同じく強硬に党は女性解放のためにも戦っている。ドイツと対照的にイタリアでは多くの女性労働者が組織化され、彼女たちは幾度となく、男性パートナーと同様に賃上げを要求できるだけではなく、勝ち取ることもできることを見事に実証してきたのである。党自身もその最前列に勇敢な女性リーダーを擁している。」ミヘルスはここでパオラ・ロンブローゾの名をあげている。彼女は有名な刑法学者チェーザレ・ロンブローゾ——1895年にPSIに入党、後にトリノでミヘルスと親しくまじわることになる——⁽²⁵⁾の娘で、トリノの社会主義系の新聞“Grido del Popolo”の編集に携わっていた。もしかしたらミヘルスは最初のイタリア・フェミニズム研究者の一人かも知れない。

反軍の闘争もイタリア社会主義の特徴である、とミヘルスは指摘してい

る。軍隊はバラスト、余計な荷物のようなもので、この「高価な玩具」に要するコストは人民を苦しめている。ミヘルスは「すべての平和愛好家は社会主義者でなければならぬ」とする党のリーダー、エンリーコ・フェッリの言葉を紹介している。

ところで、イタリアとドイツの社会主義には共通性もあり、それへの非難——無宗教、祖国無視、政敵への容赦の無い敵対——にも似たところがある。さらにフランスやドイツと同じように、社会主義者が自由主義の陣営へと移り、体制内化するだろうという希望はイタリアでも聞かれる、とミヘルスは観察している。PSIはその成立当初から革命派と改良派の——いわゆる最大限綱領派と最小限綱領派——内部対立をかかえていたことはよく知られて⁽²⁶⁾いる。

しかしここでの主眼がイタリアと他の国の社会主義の違いを見分けることにあることはいうまでも無い。先ず国内の他党に対する姿勢でイタリアとドイツでは異なる。SPDとは異なり、PSIは同一目標の達成のためには急進派や共和派とも協力するのにやぶさかではない。これら3党は共通に「人民の党」partiti popolariと自称しているが、政敵からは「過激党」partiti estremiとか「破壊党」partiti sovversiviと呼ばれている。ドイツでは急進的自由主義派は右翼よりも、心情的には近い左翼の政敵に対してより敵対的である。ドイツとイタリアにおける自由主義の政治姿勢の違いという点でも興味深い指摘ではある。イタリアで有力な共和派のナポレオーネ・コラヤニは社会主義に非常に接近しており、「この政党の存在は人類の愛他主義的良心の進歩以外の何ものをも意味していない」(P. 496)と自著の中で認めさえしているのである。従って自由派と社会党との協力には利点がある。

以上は戦術レベルの相違点であるが、それよりも大きな違いを示すのが支持者の社会的構成である。イタリア社会主義研究におけるミヘルスの最大の特徴は、党员や支持者の階層分析にあるのだが、この視点は最初期の研究から一貫している。第5論文「イタリア社会主義」によれば、SPD

は圧倒的に労働者階級の政党であり、有産者とインテリはこの「新しい理念」に敵対的であるかせいぜい無関心である、とミヘルスは指摘する。それに対してイタリアでは「ほとんど全ての階層が一様にその思想に引き寄せられている。」(pp. 496-7) もちろん党派色の違いも関係している。すなわちミヘルスによれば、イタリアの政党は全体として左派的である。だからイタリアで「保守派」にあたるのはドイツでは新カント派の哲学者ハインリヒ・リッケルトのグループに近いとミヘルスは評価する。「全人民の民主的な特性が社会主義を非常に助長したのも当然である。」(P. 497) ミヘルスにおける反民主的なプロイセンに対する反感は、イタリアに対する過剰の思い入れを誘発したようでもあるし、逆にドイツ人に対する意図的な警鐘と啓蒙なのかも知れない。ところで、24才のミヘルスが強い関心を寄せたのは学生と青年の支持者である。イタリアでは「社会党の主要メンバーを形成するのは都市と農村の労働者人民の他には大都市の学生である」からである。こういう状況と「イタリア特有の思想の違いに対する寛大さのために、イタリアの社会主義者は社会的ボイコットにあったりはしないようであるし、自分の意見を自由にかつ公然と語るのを控える必要は全く無い。」

P S I に大挙加入したのは年令的な意味で若い学生・青年だけではない。「精神と活力の上での青年」, しかも著名な人たちが「この新しい運動」に好意的であったし、社会主義の影響を受けているとミヘルスは評している。程度の問題は残るとしても、ミヘルスのあげたリストは以下のようなものである。アルトゥーロ・グラフ[トリノ大学文学部教授, グラムシの師], ヴィルフリード・パレート, アントニオ・フォガッザーロ [小説家], 歴史家コルラード・コルディーニ, パオラ・ロンブローゾの夫のグリエルモ・フェルレーロ [ローマ史家], チェーザレ・ロンブローゾとエンリーコ・フェッツリ [刑法学者, ローマ大学教授], 詩人アダ・ネグリ。続けてミヘルスは転向について触れている。「転向でさえイタリア社会主義には幸運であった」と述べ、先ず有名なエドモンド・デ・アミーチスの例をあげる。君主主義

者の最たるもので、軍に友好的で『兵隊物語』の著者そして騎兵隊士官のアミーチスである。彼はミスルへによれば「大衆の悲惨に心を奪われ、彼独自の、何ものにもたじろがない理想主義で社会主義の支持にまわり、…自己の新しい信念を唯一の救いとして促えた。」(P. 497-8)⁽²⁷⁾そして極めつけは、近代イタリアで最も賛美された人気詩人のガブリエル・ダヌンツィオで、彼も社会主義の影響を免れることは出来なかったとされる。もっとも、すぐ「敵陣営」に寝返ったとされるが。

最後にミヘルスは、社会主義がイタリアを「活性化」させたことを指摘して、逆に「我々ドイツ人」にとっては不利益をなしたと述べている。というのもイタリアの社会主義者たちは、ドイツ・オーストリア・イタリアの三国同盟(1882)に反対していたからである。彼らはそこに「人民の権利を弾圧する専制的列強の同盟」しかみていない。関税の引上げも加わり、三国同盟は危殆に瀕している。といってもミヘルスはすこしも憂えることはない。24才のミヘルスの政治スタンスではイタリア志向で反プロイセンのコスモポリタニズムと穏健な社会主義と要約できよう。若者特有の観念的ラディカリズムはみられない。事実につく実証主義的精神が優勢だからであろう。

最後にフェッラーリスの青年ミヘルス研究のエッセンスを紹介しておこう。というのも従来解釈に一石を投じた解釈だからである。それは第二論文「ドイツにおける社会問題」にかかわる。フェッラーリスによればこの論文は青年ミヘルスが社会主義へと接近するようになった文化的背景を示してくれる。まずこれまでの見解を要約しておこう。一方のミッツマンは「ミヘルスの理想主義的な社会哲学という前提」に触れており、他方のレーリヒは「彼の初期の著作にバクーニンやブルードンの理念に該当するようなアナーキズム的ニュアンス」をあたえる「革命的理想主義」と「倫理的社會主義」を主張していた。⁽²⁸⁾ビーサムは、非決定論的で批判的なマルクス主義と革命的サンディカリズムをあげる。⁽²⁹⁾フェッラーリスはこれらの解釈を退け、この論文は「社会ダーヴィニズム色の濃い実証主義的進化論

を強く志向した世界観」を示しているとする。⁽³⁰⁾なるほど本稿には「生存競争」struggle for living という言葉もあらわれ、社会闘争は一種の生存競争のようである。不可避の社会進化は、生存競争を規制し道徳化する路線に沿った前進としてあらわれる。フェッラーリスはエンリーコ・フェッ⁽³¹⁾リの影響を示唆している。ミヘルスの世代の知識人にとって実証主義は社会主義とマルクス主義への「文化的橋わたし」の役を果たしていたことはつとに知られている。⁽³²⁾ミヘルスにあっては、それは社会ダーヴィニズムに染まったSPDへの接近を意味する。⁽³³⁾この「実証主義による媒介」は重要である。というのも従来はリンスを初めとして、ミヘルスにおける非合理主義的な動機づけに関心が寄せられきたからである。ミッツマンはこう書いている。「プロレタリアートを社会主義に促す力は経済的必要である。しかしブルジョアジーの裏切り者では、それは科学的か感情的かのどちらかのタイプの理想主義である。ミヘルスが自分の動機づけを科学的よりは感情的な方とみていたことを信ずるにただけの理由が存在する。」またレーリヒはしばしばミヘルスが「感情的なタイプ」の人間であり、社会主義への接近も感情的ないし非合理的な性質のものであることを強調している。⁽³⁴⁾フェッラーリスは、まさにこういう解釈を否定するのである。「本当は実証主義者ミヘルスは科学的客観主義と同時に政治的・社会的投企への主観的感性にあふれていたのである。そして当時の実証主義的マルクス主義者はこの二つの要求を完全に満たしてくれたように思える。⁽³⁵⁾「人間社会の客観的で公平な分析によって実証主義的な科学は社会主義の必然性を際立たせる。個別利益や個人的特権のために科学的調査が実践的帰結を導き出さないひとは〈不正に振る舞っている〉。そうではなく、自己の物質的利益を犠牲にし、そのブルジョア階級を否定して特権的な利己主義を捨て去る人は、科学の厳格さと理想の威厳との大義のすべてを実現するのである。」実証的科学に裏づけられた理想主義とでも言えよう。

注

- (1) 広瀬英彦訳『政党政治の社会学』ダイヤモンド社、1975、i頁。

- (2) Robert Michels, 'Peter Michels und seine Tätigkeit in der rheinischen Industrie, in der rheinischen Politik und im rheinischen Gesellschaftenleben in 12 Jahrbuch des Kölnischen Geschichtsvereins, Köln 1930. ミヘルスの論文は基本的にはミヘルスの没後出されたベルギー大学の紀要のミヘルス記念号で同僚のクルチオが作成したミヘルスの著作目録の通し番号で指示する。「はじめに」注⑧参照。ただし、この目録にもれた文章についてはその都度指示する。
- (3) *idem.* S. 45-47. 原文は大内兵衛生・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第7巻, 大月書店, 1961, の111-113頁にある。
- (4) 初期ミヘルスに仮託して祖父のこの利他主義に注目したのはミッツマンである。Mitzman, *ibid.*, p. 275.
- (5) Mitzman, *ibid.*, p. 275. ヒューズも名著『意識と社会』で、プロイセン南部にゆかりのある知識人ヴェーバー、マイネッケ、トレルチに触れてこう書いている。「ともあれ、南西部はかれらに強い刻印を残した。たとえ忠誠なプロイセン人でありベルリン子であっても、しばらくライン川上流の文化に住んだあとでは、ぜんぜん変わらずにいることは不可能であった。地理的にも文化的にもフランスに接近していたドイツのこの地方にあって、かれらは温雅で寛容な自由主義の雰囲気を呼吸してしまったからである。」 スチュワート・ヒューズ, 生松荒川訳『意識と社会』みすず書房, 1973年, 33頁。
- (6) Mitzman, *ibid.*, p. 280.
- (7) Ferraris, *ibid.*, p. 57.
- (8) Mitzman, *ibid.*, p. 289.
- (9) Ferraris, *ibid.*, p. 57.
- (10) 原文はローマの国立中央文書館にある。手書きのため判読困難な部分もあった。なおミヘルスの生涯については「付録：ロベルト・ミヘルス年表」を参照せよ。
- (11) "Zur Vorgeschichte von Ludwigs XIV. Einfall in Holland", Halle, Druck der Buchdruckerei des Weisenhauses. Dissertazione di laurea in filosofia.
- (12) Roberto Michels, "Attorno ad una questione sociale in Germania", in *La Riforma Sociale. Rassegna di scienze sociali politiche*, vol. XI, s. II a. VIII (1901) 775-794.
- (13) 次を参照。ヒューズ前掲書, 第7章「マキアヴェルリの末裔」。James Burnham *The Machiavellians, Defenders of Freedom*, 1943, Part V.
- (14) V. Pareto *Cours d'Economie politique professée à l'Université de Lausanne*, Lausanne, 1896.
- (15) A. Bebel *Die Frau und der Sozialismus*, 1879. ベーベル, 草間平作訳

- 『婦人論』岩波文庫, 1971年。
- (16) ミヘルスの性社会学的主著は『性道德の限界』(1911)と銘うたれている。
- (17) Roberto Michels, *La Pochade in Germania*,⁷⁾ in *La Commedia* anno. I, N. 7, 1901, (n. 3); *Il dramma moderno tedesco*, in *La Commedia* anno. I, N. 9, 1901, (n. 4).
- (18) Giovanni Sabbatucci, “Michels e Socialismo italiano,” in *Roberto Michels: tra politica e sociologia*, a cura di B. Furiozzi, 1984, p. 60.
- (19) R. Michels *Storia critica di Movimento socialista fino al 1911* の復刻版 (1970) へのジョヴァンニ・サッバドゥッチの序文を参照。
- (20) Giovanni Sabbatucci, “Michels e Socialismo italiano,” in Furiozzi, p. 60.
- (21) 『講座マルクス主義, 3, マルクス主義思想史』(水田洋編), 日本評論社, 1970, 174頁。
- (22) R. Michels, “Der Sozialismus in Italien”, in *Das freie Wort Frankfurter Halbmonatsschrift für Fortschritt auf allen Gebieten des geistigen Lebens*, Jahrgang I, N. 16, p. 492-498. 「ロベルト・ミヘルス, マールブルク」の署名あり。
- (23) 山崎『イタリア労働運動史』57頁。
- (24) 同上, 161頁。
- (25) 氏家「ロベルト・ミヘルスの同時代人論, (3)チェーザレ・ロンブローゾ」『神戸学院法学』第15巻第2号, 1984年の記者前書きを参照。
- (26) 山崎, 160—161頁。
- (27) のちにミヘルスは美しいデ・アミーチス論を書いている。拙訳「ロベルト・ミヘルスの同時代人論, (4)エドモンド・デ・アミーチス」『神戸学院法学』第15巻第3号, 1985年を参照。
- (28) Mitzman, *ibid.*, p. 290 ; Röhrich, *ibid.*, S. 17.
- (29) Beetham, *ibid.*, p. 19-20.
- (30) Ferraris, *ibid.*, p. 59.
- (31) Ferri, E., *Socialismo e scieza positiva*, 1894.
- (32) イタリアにおける「マルクス主義の実証主義的理解」とダーヴィニズムの関係については, 水田, 前掲書, 165頁を参照。
- (33) Ferraris, *ibid.*.
- (34) Mitzman, *ibid.*, p. 277-278 ; Röhrich, *ibid.*, S. 13.
- (35) Ferraris, *ibid.*.

付録・ロベルト・ミヘルス年表

1876年：1月9日ケルンでカトリックの富裕な家に生まれる。父ジュリオ——祖父

ペーターと事業の創始者の曾祖父 Mathias と同様繊維の商人——は市の参事であり、そのうえ商工会議所支部のメンバーであり、市の経済社会生活で卓越した地位を占めていた。母アンネ・シュニッツラーはミヘルスに最初の教育をほどこす。次いで最初の勉強をベルリンのコレージュ・フランセーズで行う。

1888年：アイゼナッハ（テューリンゲン州）のカール・フリードリヒ高等学校進学。

1859年：軍隊に入隊。軍隊生活を終えると、そのキャリアを棄てて大学へと進む。

1896—99年：ミュヘン大学で経済学者ルヨ・ブレンターノ（1844—1931）——有力な「講談社会主義者」の一人で社会・自由主義的総合を主張していた——の指導の下で研究を始め研鑽を積む。次いでドイツとフランスのいくつかの都市で様々の講座に籍をおく。特に通ったのはソルボンヌ大学、ミュンヘンのカール・ランプレヒトの講義、ハレ大学の歴史学者テオドル・リントナーの講義に参加。リントナーの娘ギーゼラと1899年に結婚し、都合3人の子をもうける。

1900年：11月7日、ハレ大学において「ルイ14世の前史について。オランダへの侵略」で哲学の学位を取得。

1901年：フランクフルトの“Das Freie Wort”紙に、イタリア社会主義に関する彼の最初の論文を発表。妻と初めてのイタリア旅行。“La Riforma Sociale”に寄稿開始。

1902年：トリノの労働評議会とイタリア社会党 P S I に登録。

歴史学の資格でアカデミニズム界へ入るため、マールブルク大学に二つの論文「1848年革命前後のフランス社会主義者の綱領」と「ルイ14世の宮廷における共産主義的陰謀」を提出する。両者ともエドワルド・ベルンシュタインの編集する雑誌，“Dokumente des Sozialismus”に発表された。しかしミヘルスはまさにその顕著な急進的社会主義の故に大学職は拒否された。ドイツ社会民主党 S P D と国際社会主義運動の領域における彼の政治ジャーナリズム活動が頂点に達する。イタリアとフランスへと研究旅行を行い、そこでの社会主義者のグループと密接な関係に入り始める。なかならず革命的サンディカリズムの傾向の若いイタリア人社会主義者アルトゥーロ・ラブリオーラ、エンリコ・レオーネを識り親交をむすぶ。彼らとはそれ以来熱心に協力しあう。〔1907-08年頃まで続いた模様。〕

1903年：アルトゥーロ・ラブリオーラがミラノで出している週刊誌“Avanguardia Sozialista”に寄稿し始める。S P D ドレスデン大会に派遣される。そこではアウグスト・ベーベルとカール・カウツキーの合流地点で結成された多数派の反改良主義の立場に立った。オーバーヘッセンのアルスフェルト選挙区に S P D から帝国議会選挙に立候補し、1198票を獲得するも当選せず。

1904年：パリの社会科学自由大学やブリュッセルの自由大学で講演や短い講義を行

う。彼の政治的立場はますます革命的サンディカリズムに近づき、代わりに SPD にますます批判的になる。ジョルジュ・ソレル (1847-1922) と懇意になり、ウペール・ラガルデルの編集する “Le Mouvement Socialiste” 誌に緊密に協力し始める。フランスの革命的サンディカリズムの世界と交友関係に入り知的交流をむすぶ。ボローニャでの SPI 全国大会を控えて、ブレシャで行われたロンバルディア州の SPI 地区大会で多数派を形成した “Avanguardia Socialista” のまわりに集まった革命派とカール・カウツキーを連絡させ協力させるという重要な役割を果たす。5月ミヘルスは “Avanguardia Socialista” に、反議会主義の任務でアウトウーロ・ラブリオーラのグループとエンリコ・フェッリのグループが同盟するよう、それを支援するカウツキーの手紙を掲載し、ボローニャ大会で成功させる。8月社会主義インターナショナルのアムステルダム大会に参加。

1905年：SPD イエナ大会にマルブルク支部代表として参加。マックス・ウェーバー、ヴェルナー・ゾンバルト、エドガー・ヤッフエの共同編集になる “Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik” に寄稿し始める。ローマで刊行されたばかりのエンリコ・レオーネの雑誌 “Il divenire sociale” に寄稿。

1906年：ドイツの労働組合組織と SPD を批判する講演をパリで行う。SPD のマンハイム大会に派遣される。“Archiv” に彼の最初のまとまった論文3篇が発表される。三つとも社会主義の問題を扱っている。その中では特に、SPD の綿密な統計的分析をおこなった「ドイツ社会民主党」が目を引く。そして “Le Mouvement Socialiste” 誌のサンディカリストとイタリアのサンディカリストとの政治的・イデオロギー的な対照の時代がはじまる。さらに、反ドイツのニュアンスでの反軍国主義が一層激しくなり、そのため SPD との抜きさしならない敵対関係に入る。6月、イタリア移住を決意し、トリノ大学で教授資格を得るべく必要な連絡をとる。ウェーバー、ローリア、モスカ、ロンブローゾ、エイナウディの支援を受けた。

1907—08年：パリで開かれたサンディカリズムと社会主義の関係に関する国際会議に参加（そこでの議論は7月に “Le Mouvement Socialiste” に発表され、翌年ラガルデルが編集して本になった）、そこで彼は明白にサンディカリズムの主張に全面的に同意する旨を表明した。党を離れマルブルクを去り、トリノに移る。そこでは、教授資格をとったのち、1913年まで経済学を教える。SPI の代表としてインターナショナルのシュツットガルト大会に参加。SPD ヘッセン大会に参加。“Archiv” (1907) に重要な論文「国際組織におけるドイツ社会民主党」を発表、SPD との明白な別離の時期が来る。1908年には「社会の寡頭制的傾向。民主主義の問題についての考察」を発表するが、これは1911年、現代民主主義における政党の社会学に捧げられた体

系的な本の中に組み込まれることになる研究の最初の萌芽である。もはやイタリアに居住しているミヘルスは、学問的仕事に専念するためジャーナリストの仕事が減らす。最初の体系的著作『イタリア社会主義運動におけるプロレタリアートとブルジョアジー』（1908）を刊行。ここでは2年前に“Archiv”に同じタイトルで発表した論文の内容を大きくふくらませている。“Archiv”との協力はまだ続いている。

1909年：指導的な革命的社会主義者のベニート・ムッソリーニがミヘルスの著作「経済人と協同」を評価すると公表した。〔この年までPSIに党员登録している。〕

1909—10年：『イタリアにおけるマルクス主義の歴史』を出版。

1911年：ライプツィヒで『現代民主主義における政党の社会学。集団活動の寡頭制的傾向についての研究』を刊行。これはそれまでの彼の研究のすべてを集約したもので、彼の著作で最も優れたものである。

1912年：アルフレード・ポッレドロのイタリア語訳『政党の社会学』がトリノのUTET社から出る。“Archiv”に論文「イタリアにおける帝国主義の形成史への諸要素」を発表。そこで彼は、イタリアとトルコの戦争の翌日に、イタリアの帝国主義と植民地主義の問題に取組み、経済と人口の二つの理由でそれらを正当化する。

1913年：“Archiv”の共同編集者になる。ドイツ国籍を放棄しイタリア国籍を請求する。（しかしそれは戦後の1921年やっと取得する。名前もRobertoに変える。）シチリアはパレルモのサンドロ社から『人民諸階級に関する経済論集』を刊行。

1914年：スイスのバーゼル大学で経済学と統計経済学そしていうまでもなく社会学の講義を担当することになり、生計上の問題にも促されてこの年スイスに移住。第一次世界大戦の勃発とイタリアがとった立場による対立との故に、マックス・ウェーバーと決裂する。1912年の“Archiv”に発表された論文に手を加えて、イタリア語版の『イタリア帝国主義。政治的・人口統計学的研究』として刊行する。

1916—20年：スイス時代ヴィルフレド・パレートをしばしば訪れ、ローザンヌ大学での教鞭生活25周年に際しては記念式を組織する。同じ時期、熱心に時事的ジャーナリズム活動に励み、それは学問的な仕事と並行して行われた。

1918年：『経済と幸福』（ミラノ、Vallardi）刊行。

1920年：シチリアはカタニア大学で講義。

1921年：『戦時中のスイスにおけるイタリア人植民地』（ローマ、動員の歴史研究所、統計・経済学シリーズ）

1922年：『激化する窮乏化とその起源に関するカール・マルクスの理論。経済学説史への寄与』（トリノ、Bocca）を刊行。これには経済文化でイタリアが

占めた役割に顕著な賞賛がなされている。

1923年：ファシスト党に入党。

1924年：シチリアのメッシーナ大学で講義。若干加筆した『政党の社会学』ドイツ語第二版を刊行。

1925年：ドイツで『イタリアにおける社会主義とファシズム』（ミュンヘン, Meyer und Jessen）を発表。ここで彼は国家の根源的の革命を企むファシズムの勝利の後のイタリア政治の動向にかんする彼の解釈を披瀝する。

1926年：『イタリア社会主義運動の批判的歴史』が出る。これは1921年に書かれたものだが、La Voce 社（フィレンツェ）の経済的不安定のためこの年まで延びたのである。5月にローマ大学政治学部で行った講義をもとにした『政治社会学講義』（ミラノ, Istituto Editoriale Scientifico）を刊行。

1927年：シカゴとウィリアムズタウンの政治研究所で講義。

1928年：遂にバーゼルを去り、ベルージャ大学の政治学部で一般経済学と協同体経済学の講義を担当することになる。そこではまた経済学説史も教える。同時にフィレンツェのチェーザレ・フィエーリ研究所の政治学教授ともなる。住居はローマ。

1930年：バーリのラテルツァ社から平易な本『ドイツ経済史概論』を出す。これは、オットー・シュナーベルの編集する『ドイツ研究のハンドブック』が1927年彼に頼んだ同じテーマでの短い著作に手を加え現代化したものである。

1932年：「ドイツにおけるサンディカリズムの底流（1903—1907）」を発表。そこで彼はサンディカリスト時代を自伝的に、第3人称形式で回想し、自分の戦闘的社会主義とその動機を解説している。

1933年：『民主主義と権威の研究』（フィレンツェ, La Nuova Italia）。

1934年：ジュゼッペ・モッタイとチェスティーノ・アレーナが編んだ新シリーズ『外国とイタリアの経済学者』の最終第12巻に、長大で重要な「序文：政治と経済」を書く。これにはアントーニオ・ラブリオーラ、カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス、アキッレ・ローリア、ヴィルフリード・パレート、マックス・ウェーバー、ゲオルグ・ジンメル の著作が含まれている。

1936年：支配階級と寡頭制化傾向についての彼の研究を現代化して『政治階級の新研究。戦後の社会的・知的推移に関する論文集』（ローマ, Soc. An. Ed. Dante Alighieri）を刊行。5月2日ローマで死す。彼の書いた文献は700点を越える。

(Roberto Michels. *Potere e Oligarchie. Antologia 1900-1910, a cura e con introduzione di Ettore A. Albertoni, 1989., pp. 65-71 de Viviana Ravasi がまとめたものに訳者が若干加筆したものである。)*